

学びに "プラス1" 「物事の決定の仕方」②

前回の学びに "プラス1" では、「決定の仕方」及び「多数決の矛盾」について紹介しましたが、今回は、「単記投票の矛盾」について紹介します。

《中学公民「わたしたちと現代社会」》

単記投票の矛盾



「単記投票」とは、各投票者が与えられた選択肢のうち一つだけを投票用紙に記入し、最大得票数の選択肢を採用する方法で、生徒会選挙、県知事選挙、市町村長選挙等に採用されています。

〈例1〉生徒会会長選挙

立候補者：Aさん、Bさん、Cくん

投票者	選好順序
Hさん	A > B > C
Iくん	A > B > C
Jさん	A > B > C
Kさん	B > C > A
Lさん	B > C > A
Mくん	C > B > A
Nさん	C > B > A

(注) BさんよりもAさんがいいと考える

ことを記号で「A > B」と表記

「最良と思う順」

A最良・・・3名

B最良・・・2名

C最良・・・2名

「最悪と思う順」

A最悪・・・4名

B最悪・・・0名

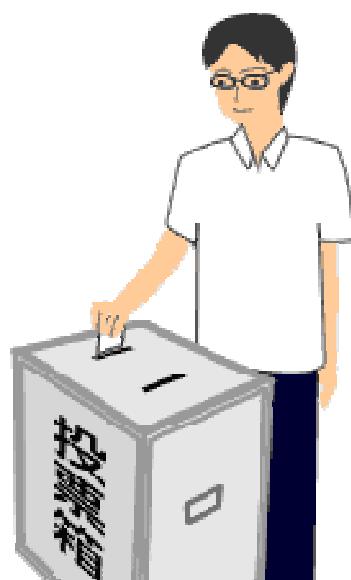
C最悪・・・3名



〈例1〉生徒会選挙の投票の結果は、Aさんを支持した人が3名で1番多いため、Aさんが生徒会長になることに決定します。

ところが、各投票者の選好順序を見てみると、Aさんが生徒会長になることを「最悪」だと思っている人が4名もいることが分かります。

このように、単記投票では、「最良」と「最悪」それぞれの1番目に同じ立候補者があげられるという矛盾が生じる場合があります。



〈例2〉 D県知事選挙

立候補者：A氏、B氏、C氏

有権者の選好順序、予想得票は次の通り。

A候補支持 A>B>C 31万人

B候補支持 B>A>C 30万人

C候補支持 C>B>A 2万人

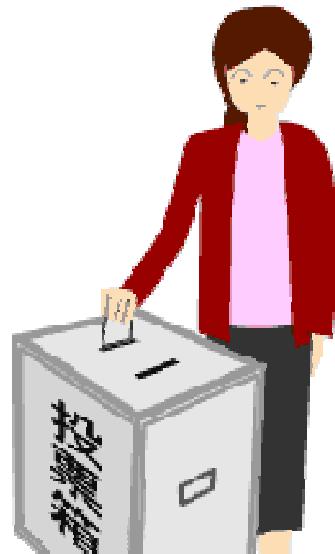


・・・選挙結果・・・

A候補 31万票

B候補 30万票

C候補 2万人



〈例2〉 D県知事選挙の結果では、A氏が当選しますが、選好順序を見てみると、A氏よりもB氏を望む有権者は32万人と過半数を超えていて、C氏よりもB氏を望む人も61万人と過半数を超えています。また、C氏よりもA氏を望む人も61万人です。つまり、この選好順序はB>A>Cといえます。

この選好によるならば、B氏が当選すべきであるといえます。これは、単記投票による矛盾を示しているとともに、単記投票によって最大得票の候補者が、他の候補者と比べて支持されていることを必ずしも意味しないことを表しています。

もしも、C候補者が立候補しなかったり、上位二者（A・B氏）で決選投票したりすれば、B氏が32万票、A氏が31万票で、B候補が当選していることになります。つまり決定の方法によって結果は大きく左右されるとともに、C氏が、選挙に出るか出ないかによって結果は変わり、そこに戦略的投票の可能性が秘められているといえます。

このような矛盾を避けるため、フランスの大統領選挙は、単記2回投票制となっています。第1回投票で選出されるには、絶対多数（有効投票総数の50%プラス1票）を得る必要があります。どの候補者も絶対多数を得られなかった場合は、上位2人の候補者の間で第2回投票が行われます。その結果、単純多数（最も多数の票）を得た候補者が当選します。また、IOC（国際オリンピック委員会）におけるオリンピック開催地の決定等においては、過半数の支持がない場合には、上位得票者による決選投票が行われています。

社会における出来事が、どのような方式や理論に基づき決められているかを知ることは、近い将来、社会における「物事の決定」に関わる中学生にとって、必要な学習であると考えます。

